

ネットワーク通信

2003
NO.18
秋号



アンケート1
「教育に関するアンケート」集計結果	
論談倶楽部7
子供の育ちの環境をめぐって	
企業と生活者懇談会12
「スカイパーフェクト・コミュニケーションズ」(東京)	
「林原」(岡山)	
「キヤノン」(東京)	
ご意見・ご感想25

Illustration : Kyoko Takenaka

「教育に関するアンケート」集計結果 社会広聴会員アンケート

減っている家庭でのスキンシップ

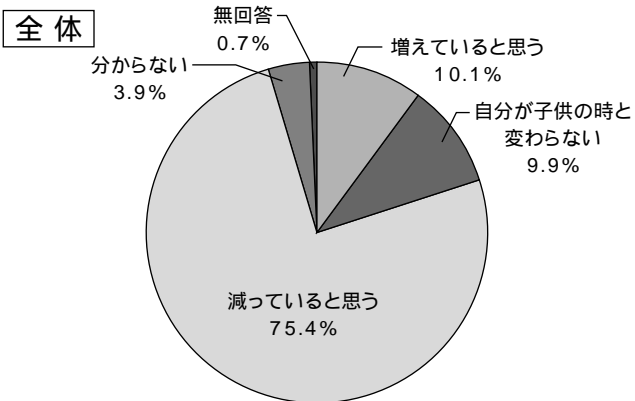
1 家庭で規則を教え、子供とスキンシップをとっているか

75.4%が減っているという回答

家庭でルールを教えたり、子供とスキンシップをとる機会について「自身の子供の時の比較を聞いた。

全体の75.4%が減っているという回答。「増えていると思う」との回答は、わずか、10.1%であった。世代別の「減っていると思う」という回答は、20歳代以下が82.8%でトップ。以下、60歳代以上は81.3%、50歳代は77.1%と、いずれの世代でも低下を指摘する声が多かった。

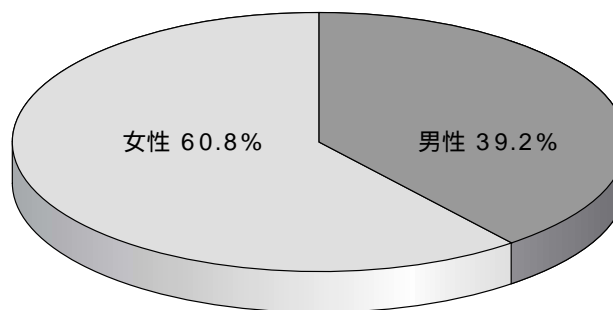
～家庭で規則を教え、子供とスキンシップをとる機会～



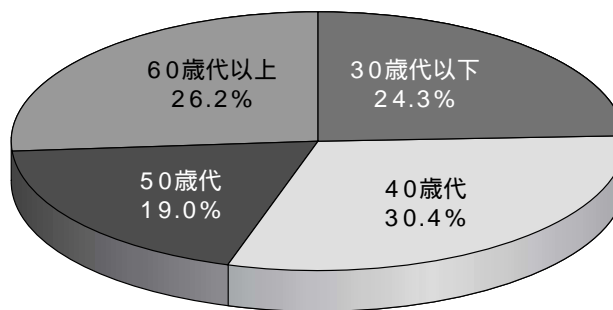
調査の概要

- (1) 調査名称：「教育に関するアンケート」
- (2) 調査対象：財団法人 経済広報センターに登録している社会広聴会員4,614名
- (3) 調査方法：郵送またはインターネットによる回答選択方式および自由記述方式
- (4) 調査期間：2003年8月8日～8月27日
- (5) 有効回答：3,591名 (77.8%)

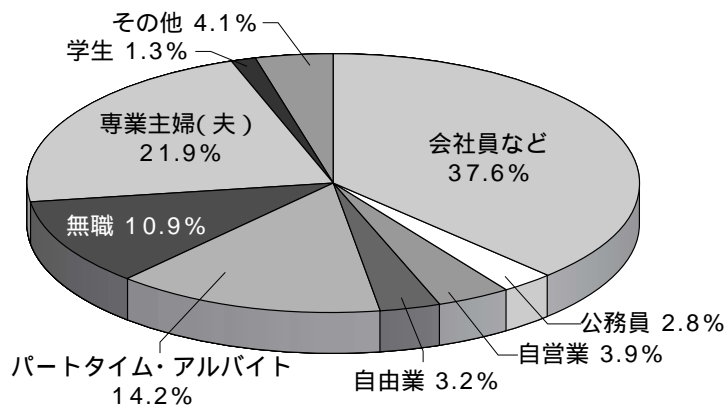
性別



世代別



職業別



今回は「教育」をテーマに、8月8日から8月27日にかけてアンケート調査を実施した。有効回答者数は3591名(77.8%)だった。「家庭におけるルールの教育や親とのスキンシップの頻度」、「心がけたスキンシップ」などについて調査をした。

また、学校における人間性の形成に関して、「他人を思いやる心を学ぶ場として学校は機能しているか」といったことや、「人間性の形成のために強化すべきこと」についても聞いた。調査を通じて、「コミュニケーションの減少」や「スキ

ンシップが上手に図れないこととのジレンマ」などが明らかになった。また、多くの方に自由に意見を記述していただいたが、そこからは教育に対する一人ひとりの真剣な思いを知ることができた。

2 小学校入学前にルールや規則を教えることができたか

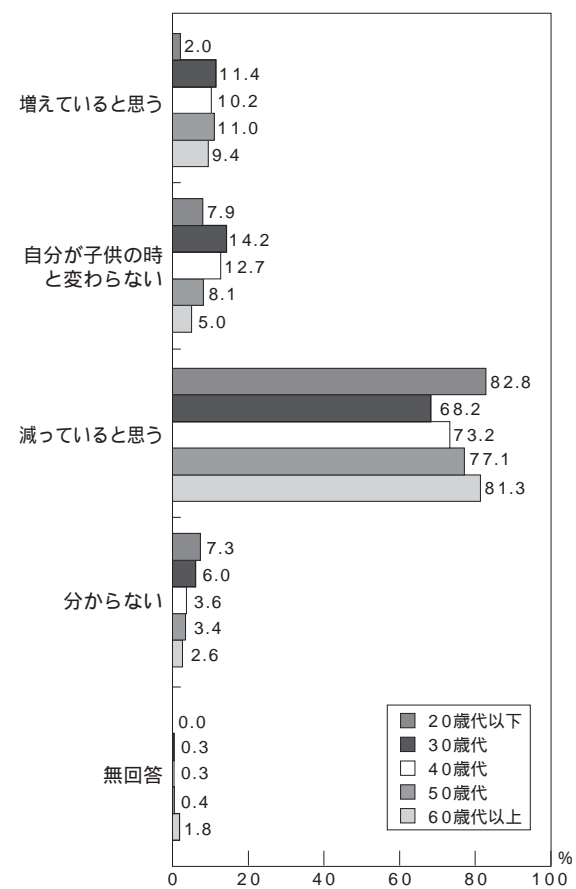
40歳代が最も高く、84.1%が「教えることができた」と回答

小学校入学前までのルールや規則の教育について聞いた。

「教えることができた」(十分に教えることができた+ある程度教えることができた)との回答は、全体の79.2%であった。

「教えることができた」(十分に教えることができた+ある程度教えることができた)の世代別回答で最も高かったのは、40歳代の84.1%。一方、最も低かったのは60歳代の71.4%であった。

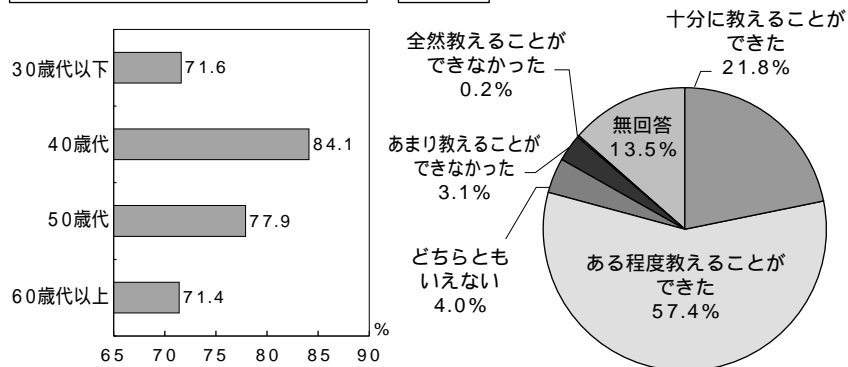
世代別比較



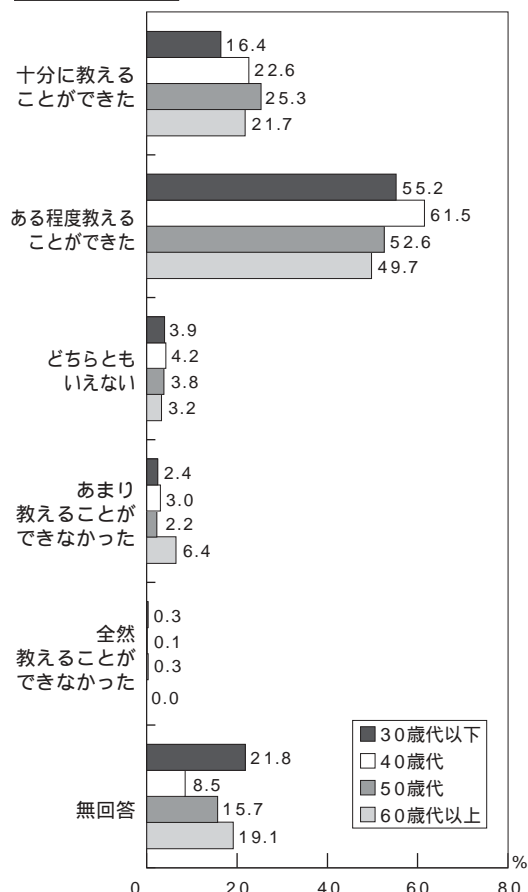
「十分に教えることができた」と最も多く回答したのは50歳代の25.3%。40歳代、60歳代においても20%以上が「十分に教えることができた」と回答した。

～小学校入学前にルールや規則を教えているか～

「教えることができた」世代別比較



世代別比較



3 小学校入学前のスキンシップ

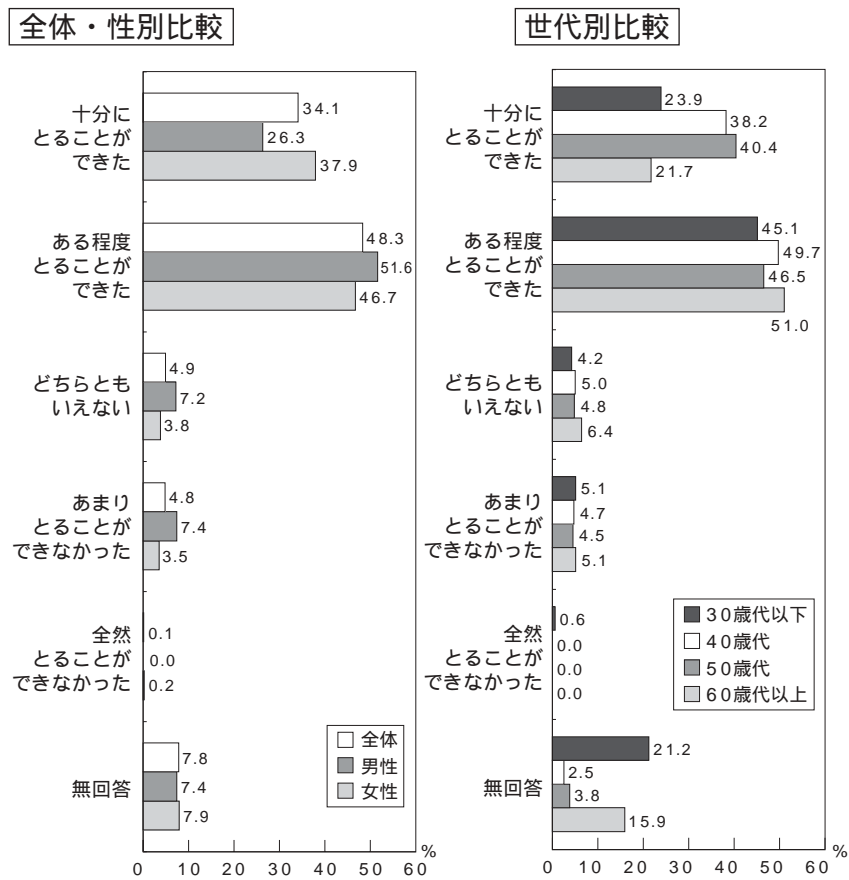
男女で「十分とることができた」に11・6ポイントの差

小学校入学前までの子供とのスキンシップについて聞いた。「ある程度とることができた」という回答は全体の48・3%。「十分とることができた」との回答は全体の34・1%で、全体の82・4%が「とることができた」と回答している。

性別では、「十分とることができた」と回答した女性が37・9%であったのに対し、男性は26・3%であった。男女で11・6ポイントの差があった。

世代別では50歳代の40・4%、40歳代の38・2%が「十分とることができた」と回答した。現在子育て中であろうと想定される30歳代以下は23・9%であり、40歳代に比べ約15ポイント低下している。

～小学校入学前のスキンシップ～



5 実践できなかったスキンシップ

男性は「食事を一緒にする」、女性は「一日に一回は抱きしめる」

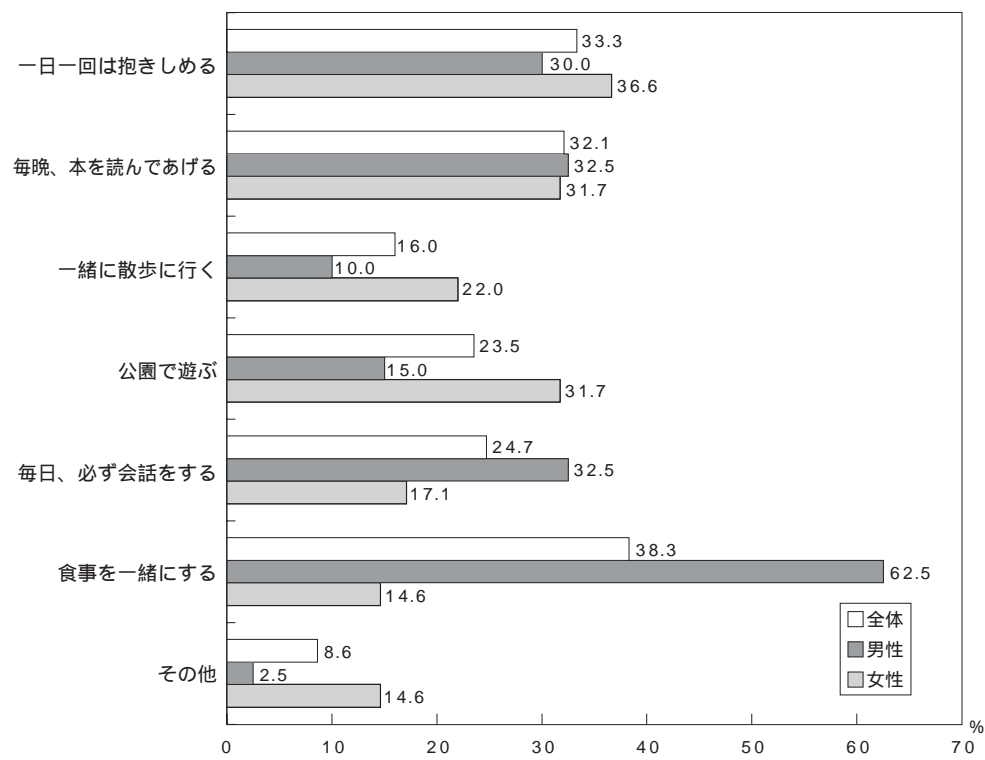
実践することができなかったスキンシップについて聞いた。「食事を一緒にする」が38・3%で

トップ。「一日に一回は抱きしめる」(33・3%)、「毎晩、本を読んであげる」(32・1%)と続く。

男女別では、「食事を一緒にする」が男性のトップ(62・5%)。女性のトップは「一日に一回は抱きしめる」(36・6%)だった。

～実践できなかったスキンシップ～

全体・世代別比較



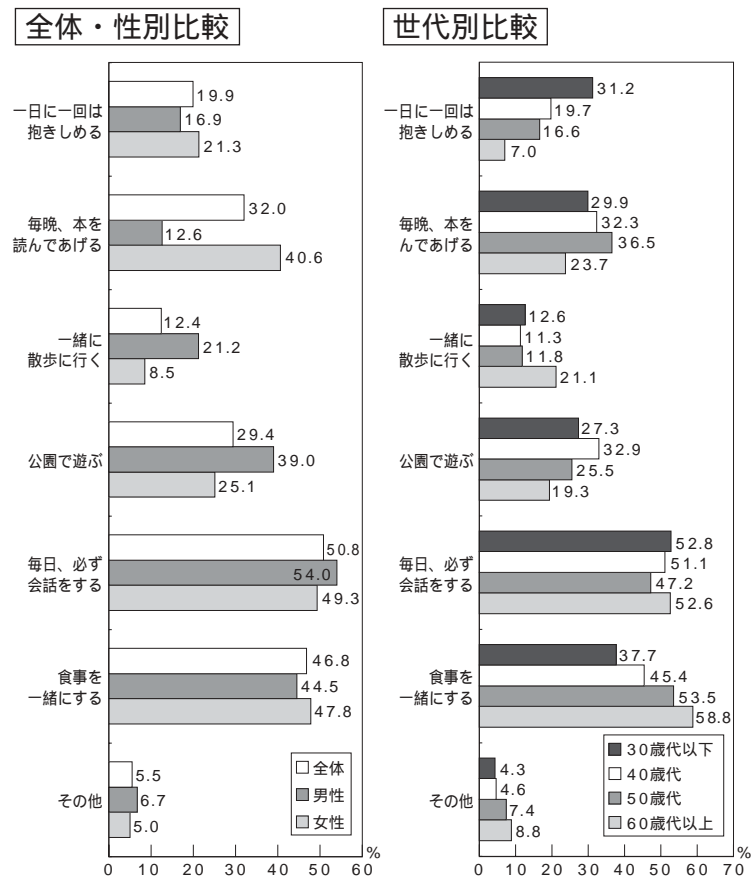
4 どんなスキンシップを心がけたか

世代でスキンシップの内容に大きな特徴

心がけて取り組んだスキンシップの内容について聞いた。「毎日、必ず会話をする」が50・8%でトップ。次いで「食事を一緒にする」(46・8%)、「毎晩、本を読んであげる」(32・0%)と続く。

世代別でもスキンシップの特徴が良く表れた。「一日に一回は、抱きしめる」と回答した30歳代以下は31・2%であったのに対し、60歳代以上は7・0%であり、24・2ポイントの開きがあった。また、「食事を一緒にする」と回答した30歳代以下は37・7%であったのに対し、60歳代以上は58・8%と、21・1ポイントの差があった。

～どんなスキンシップを心がけたか～



6 学校は「他人を思いやる心」などを身につける場として機能しているか

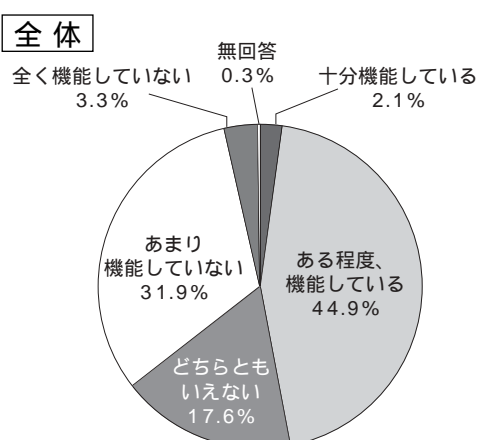
「機能している」と全体の47%が回答

学校が「他人を思いやる心」などを学ぶ場として機能しているかについて聞いた。

「機能している」(十分機能している+ある程度機能している)との回答は47%であり、「機能していない」(あまり機能していない+全く機能していない)の35・2%を11・8ポイント上回った。

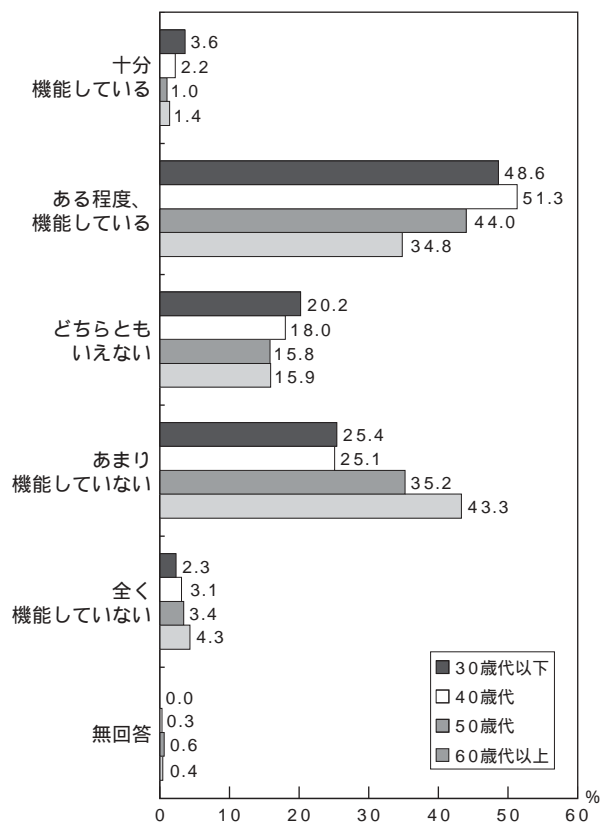
世代別では50歳代、60歳代以上と世代が高くなるほど「ある程度機能

している」との回答は低くなり、「あまり機能していない」の回答が高くなった。60歳代以上では、「あまり機能していない」が「ある程度機能している」を8・5ポイント上回った。



～学校は「他人を思いやる心」などを身につける場として機能しているか～

世代別比較



7 「他人を思いやる心」を形成する場

30歳代以下と40歳代は「学校」、50歳代と60歳代以上は「家庭」を重視

前問で学校が「他人を思いやる心」を学ぶ場として「機能していない」と回答した方に、どこがその役割を果たすべきかを聞いた。

「家庭」が44%で第1位、次いで「学校」(31.2%)であった。前問で学校が「他人を思いやる心」を形成する場として機能していないと回答したにもかかわらず、なおも「学校」に期待するという回答が30%を超えた。

世代別では、30歳代以下と40歳代は「学校」が「家庭」を上回っているが、50歳代と60歳代以上では「家庭」が「学校」を上回る結果となった。

就学者の有無では、就学者ありの回答は「家庭」と「学校」ではそれほど差が出なかったが、就学者なしは「家庭」が「学校」より重要と考えるほうが、24.3ポイント多かった。

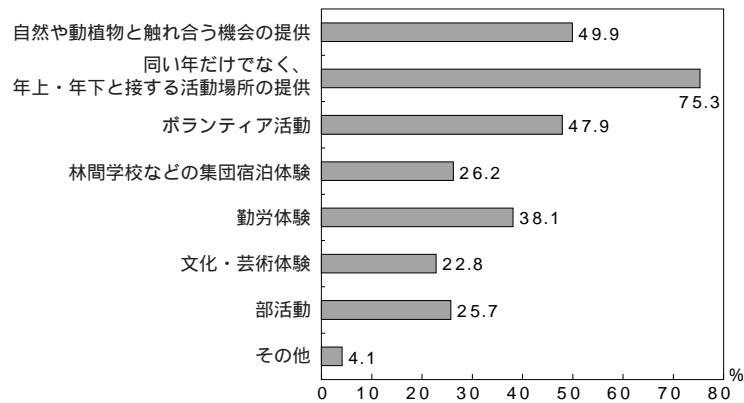
9 人間性の形成のために強化すべきこと

第1位は、同じ年だけでなく、年上・年下と接する活動場所の提供

学校で人間性の形成のために充実・強化すべきことを聞いた。

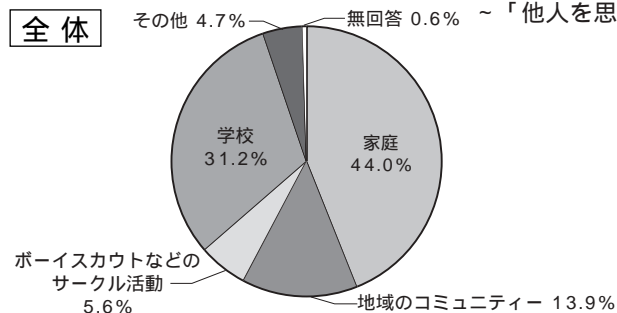
「同じ年だけでなく、年上・年下と接する活動場所の提供」が第1位で75.3%であった。次いで「自然や動物と触れ合う機会の提供」(49.9%)、「ボランティア活動」(47.9%)と続いた。

～人間性の形成のために強化すべきこと～

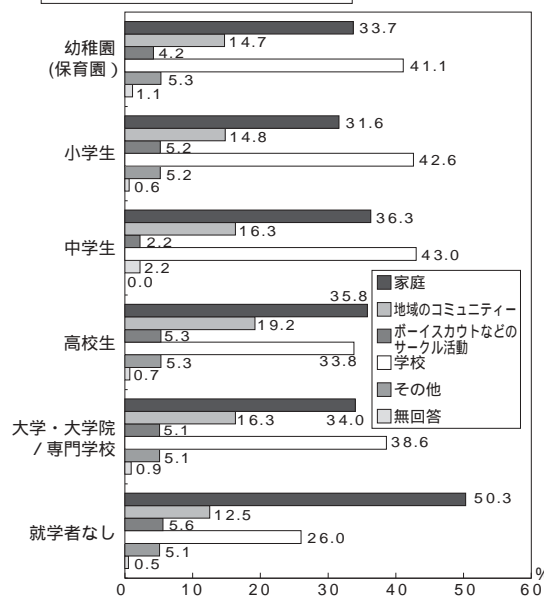


(文責 専門研究員 山田俊彦)

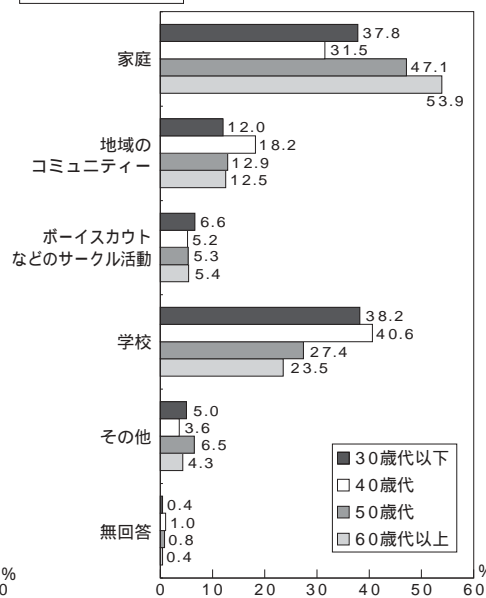
～「他人を思いやる心」を形成する場～



就学の有無による比較

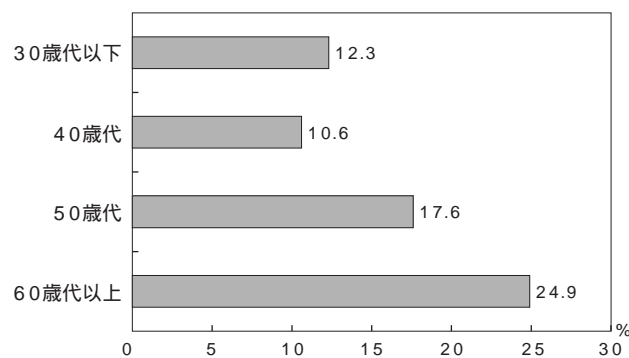


世代別比較

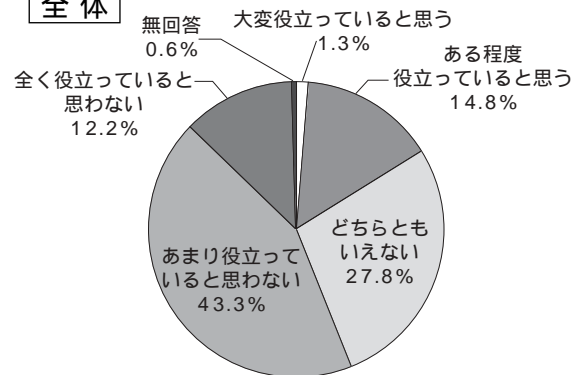


～人間性の形成における「ゆとり教育」の役割～

「役立っていると思う」世代別比較



全体



8 人間性の形成における「ゆとり教育」の役割

43.3%が「あまり役立っていると思わない」と回答

「ゆとり教育」が人間性の形成に役立っていると思うか聞いた。全体の43.3%が「あまり役立っていない」と回答した。

今回のアンケート結果を専門家はどうみるのか。小学校の元教員で、千葉大学教育学部非常勤講師の向山洋一氏に聞いた。

家庭でルールを教えたり、親とスキンシップをとる機会が大きく減っていますが。

家庭の「教育力」低下が原因です。2〜3歳の頃に「危ない」「熱い」という定義を教えなければならぬ。その後、「人の迷惑になることをしない」「ウソをつかない」、



子供たちに行った興味深い調査があります。テレビをつけたまま会話をした場合、親は会話をしたと考えていても、子供たちはテレビを観ていたとしか思っていない。双方の認識に差があります。「朝食と一緒に食べる」、

「弱いものいじめをしない」というルールを教えなければなりません。ところが、家庭の教育力低下で、何も教えていない。だから、小学校に入っても席に座っていられない。これを「一年生プロブレム」と呼んでいます。表現は悪いですが、大人になりきれしていない人が子供を産んで、社会常識にあつた教育ができない状態になっています。

「毎日、必ず会話をする」などのスキンシップに心がけていると回答がたくさんありました。

子供たちに行った興味深い調査があります。テレビをつけたまま会話をした場合、親は会話をしたと考えていても、子供たちはテレビを観ていたとしか思っていない。双方の認識に差があります。「朝食と一緒に食べる」、

「お手伝いをさせる」、「お風呂と一緒に入る」。この3つでかなりのスキンシップが図れます。スキンシップをするよりも、叱る方が多いのではないのでしょうか。また、本を読んであげること、とても良いスキンシップです。小さい時に本を読み聞かせられた子は、基礎学力が良い傾向にあります。これは親から子供への最高のプレゼントです。

先生への注文も増えています。

教育者の基本である「子供たちの目を見て話す」、「的確な指示を出す」といったことができない先生が増えています。大学の教育学部に問題があります。教師に求められる技術、技能を教えていない。実践的なことを何一つ学ばないで教壇に立ってしまう。それを教えられる大学教授がいけない点も問題です。

(聞き手) 経済広報センター
国内広報部長代理 佐桑 徹



毎日新聞社
論説副委員長 瀬戸 純一氏

「子供の育ちの環境をめぐって」

9月24日、毎日新聞社論説副委員長の瀬戸純一氏を招き、「子供の育ちの環境をめぐって」をテーマに、第19回「識者と語る論談倶楽部」を開催した。

いじめ事件や旧文部省など数多くの現場取材してきた視点から、今の子供たちを取り巻く環境の変化や、子供たちの教育に本当に必要なことなどを、多くの事例やデータを挙げて詳しくお話しいただいた。

せと じゅんいち

1948年 仙台市生まれ
1971年 毎日新聞社入社。
阪神支局、大阪社会部、東京社会部で、大阪府警、東京都庁、文部省などを担当。
東京社会部デスクなどを経て、1995年から論説委員。主に教育、メディアなどを担当。
02年から論説副委員長。

頻発する少年事件

新聞記者になって30年以上になりますが、教育問題に本格的に取り組むようになったのは、関西から東京社会部に異動になった20年ほど前からのことです。社会部では旧文部省を担当するようになり、引き続き臨時教育審議会取材しました。社会部で都合10年、教育問題を現場から取材しつづけてきました。社会部時代の仕事で印象深いのは、葬式ごっこで自殺し、世間の注目を浴びた1986年の「鹿川君いじめ事件」など一連のいじめ問題です。現在は論説の仕事をやっていますが、相変わらず教育を中心に記事を書いています。

こうした教育との関わりから、今一番感じているのは、子供が育つ環境が変わりつつあるのではないかといいことです。社会システムの柱である教育も転換期にあり、ひずみやゆがみが表面化してきている。閉塞状況といってもよい。こうした問題が表面化して、随分時間がたちますが、まだ方向性が見出せていません。日本自体もいろいろな面で転換期を迎えています。こういう時にいかに対応できるかで、国の将来も変わってきます。

ます。学校も変わってくる。その意味で、とても大事な時期といえます。

1980年代、とくに半ば以降、教育の荒廃ということが言われ出しました。具体的には、いじめ、校内暴力、不登校、高校中退、学級崩壊、勉強しない大学生など、様々な現象となって現れました。引きこもりの問題も出てきました。20歳代をすぎても、引きこもるケースもある。昭和の終わり頃、新聞の連載企画で引きこもりを取り上げたことがありません。その時、全国で1万人が引きこもりであると一面トップの記事にしたところ、大変な反響がありました。これが今100万人にも達したとも言われています。この引きこもりも、今の日本を象徴していると言えます。

鹿川君のいじめ事件は、みなさんの記憶に残っていると思います。1986年2月に葬式ごっこの「鹿川君いじめ事件」があり、1994年11月には愛知県西尾市で、大河内清輝君が100万円以上取られる事件も起きました。こうしたいじめは陰湿で、外から見ても分かりにくいものです。

少年だった。愛知県では、高校生がまったく見も知らない家のおばあさんを刺殺した。この後もたくさん事件が起きました。最近では、長崎の幼児殺害事件があります。埼玉県では15歳と16歳の少年少女が関係した殺人事件がありました。こうした事件を見ると、今の社会はどうなっているのか、と今感じます。子供たちを見てみると、心配になる。すぐキレル子供。我慢できない子供。公德心がなくなってない。自分さえ良ければというミーイズム。茶髪にピアスの女子高生が、制服のまま地べたに座りこんで、タバコを吸っている。これらからどうなってしまうのだろうか、世の中全体が心配していると思う。

一方、学力低下も指摘されています。こうして見ると、今の子供たちには良いところが全然ない、どうしようもないと思われがちです。しかし、そんなことはないのです。確かにショッキングな事件が起っています。が、圧倒的多数の子供は普通の子なのです。このことを忘れないでいただきたい。この中で長崎の幼児殺害事件などは、特異なケースだと思います。性的な事件は判断が非常に難しく、一概に皆がこうだとは言えません。

躰ができていないのか？

少年犯罪がいろいろと起きています。しかし、今が飛び抜けて多いわけではないのです。少年犯罪には戦後4つのピークがありました。第1のピークは1951年。戦争で被災し、まだ立ち直りかけている頃です。この年の少年の刑法犯罪は16万件ありました。第2のピークは1964年で、東京オリンピックの年でした。高度経済成長真っ只中で、少年の刑法犯罪は24万件に達しました。高度成長の負の部分といってよい。第3のピークは1983年でした。この年、少年の刑法犯罪は31万件で、それまでの最高を記録しました。この時期、学校や子供が大きく変化することを反映したものと考えられます。このときの分析としては、家庭や地域社会のくくりが弱くなり、機能が低下したところに原因があるとされました。1983年を境に少年犯罪の数は減少してきましたが、1996年から反転し、1997年は21万件、1998年は22万件となっています。危険ラインにあるともいえ、警察は第4のピークを心配している状況です。

第4のピークというが、現在の少

子供に異変が起きている

ただ、今の子供はいろいろな面で厳しい状況に置かれていることを認識する必要があります。学校でも家庭でも、子供たちにとっては生きていくのが大変な状況なのです。子供がいると大変だということ、いくつかのデータで紹介しています。



まず、体に異変が起きている。衰退しているといってもよい。文部科学省が、基礎的な体力などを測るために実施している「体力・運動能力調査」があります。50m走や懸垂などを行うのですが、これによると、10年前と比べて体力・運動能力が歴然と下がっている。10歳で比較すると、10年前の70%のレベルしかなくなっている。

心にも異変が起きています。現在の子どもたちは、心にストレスを抱えている。心因性の難聴、睡眠障害などの相談が増えているそうです。子供専用の心因性内科ができています。この他にも、過食症、拒食症、小児成人病が増えている。こういったこと

ですね。「いい会社に入れ」と。そうすると息子が「なぜいい大学、いい会社に入れればいいの」と問い返すのです。それに対する父親の答えは「卒業してから同窓会で自慢できる」だったのです。この答えを聞いて、息子さんは結局オウムに入ってしまった。こういことが当時、あちこちで起きました。何のために勉強するのかという子供たちの疑問に、親がしつかり答えられる論理を持っていなかったのです。

現在、教育の世界で一番大きな問題は、学力の低下です。考える力がない、勉強する意欲がないことが、大きな問題となっています。理科、数学を中心に5年に1度、学力に関する国際比較が実施されています。ここでの成績を見ると、大昔は日本は1番だった。最近でもそんなに悪くない。試験を受けた各国の子供たちに、「理科や数学が好きか」と尋ねると、成績の悪い国の子供たちのほうが「はい」と答えるのです。日本は成績が良いのですが、「いいえ」と答えています。これでは試験が終わると、中身を忘れてしまいます。まさに剥落する学力です。

小平邦彦さんという数学の先生がいらっしやいました。数学のノーベル賞であるフィールズ賞を受賞した

原因として、生活習慣が乱れていることがあげられます。例えば、朝食を家で食べなかったり、独りで食事をする孤食などもそのひとつです。塾や両親が共働きなど、いろいろな理由がある。週の3分の1は孤食という調査結果もあります。かつては学校給食廃止論が声高に叫ばれたことがありますが、現在では給食ぐらいいし十分な栄養を摂れなくなっている。

自信を持ってない子供たち

文部科学省は毎年、教育白書を出しています。平成10年版の教育白書によると、今の子供の80%がイライラ、ムシクシヤしている。小学生の55%、中学生の78%が不安を感じ、小学2年生の33%、中学2年生の66%が疲れている。これは異様な数字です。私は取材で外国に行くことが多いのですが、ときどき現地の子供たちに向かって、疲れているかと質問すると、何て変な質問をするのだろうとポカンとする。子供が疲れているわけがないじゃないかという表情です。

2002年5月に(財)日本青少年研究所が、日本、アメリカ、中国の高校生を対象に意識調査を実施しました。この結果も対照的です。い東大の先生ですが、この先生はすでに10数年前に学生に学力がないと指摘しています。しかし、ここでいう学力とは、考える力のことです。ある時、小平先生が中学の入試問題に挑戦したことがありました。しかし、算数の問題が解けなかった。小平先生は「訓練して、テクニクを身につける問題であり、これは猿回しが猿に芸をしこむのと同じだ。本当の学力にならない」と嘆いていました。子供たちに本当の意味での考える力がついていないことと関連して、いわゆる勉強ができる優等生が悪いことをしてかす現象があります。愛知県で見知らぬおばあさんを刺殺したのは、進学校の生徒でしたし、西鉄のバスジャックを起こした子供も成績が良かった。大学では、慶應の医学部生が集団レイプ事件を起こし、つい最近では早稲田のスーパーフリー事件が記憶に新しい。イベントサークルに関わる女子学生に取材で話を聞いたところ、「あの人たちは頭の中が空っぽ。偏差値は高いかもしれないけれども、中身のない男たち」と言っていました。試験のためだけの勉強は、空っぽの人間を生み出しているのです。ある社会学者は、空虚な主体を量産することが問題なのだ指摘しています。

くつかの項目を見てみましょう。ちなみに、()内の数字は10年前の調査の時のものです。

Q 自分がダメな人間だと思ったことがある。

日本73% (58%)、アメリカ48%、中国36・9%

Q 自分にあまり誇れるところがない。

日本52% (33%)、アメリカ23%、中国23%

Q 私は人並みの能力があると思う。

日本58% (65%)、アメリカ91・4%、中国93・9%

Q 全体として今の自分に満足している。

日本38% (28%)、アメリカ84%、中国65%

この結果から、今の日本の高校生は自分に誇りを持っていないことが分かります。自分をダメだと思っている者が多く、何のために勉強するのかが見出せなくなっている。作家の村上龍さんは、「今の日本の子供たちにはすべてが用意されている。ないのは希望だけだ」と言っています。なぜ、こんなことになってしまったのでしょうか。結局は大人社会の反映なのでしょう。大人社会が時代の変化に対応できずに、苦勞している。個人の利害得失を優先して、責任感はない。利便性やモノ・カネ

などの物質的快樂だけを求めている。このように、大人社会のモラルの低下が問題なのだと思います。80年代の日本はキャッチアップを成し遂げました。これとパラレルな動きとして、社会全体のモラルも低下してきたといえるのではないのでしょうか。経済大国化はプラスの面もあつたけれども、同時に発生したマイナスの面も、何とかしなければならなくなつたといえるでしょう。

考える力がなくなっている

今までの教育はモデル、手本を追いかけることが大切でした。あらかじめ決められた正解を暗記したりすることが求められた。ゴールは大学です。一流大学に入れば、それで終わり。大学生の勉強時間を国際比較すると、日本は圧倒的に少ない。小学生より少ない。これは大学生に勉強したいというインセンティブがないからです。試験をクリアするためだけの勉強になっている。勉強する意欲を見つけ出すのが難しい状況になっています。

社会部にいた時、オウム真理教事件を取材しました。ある有名私立高校生がオウム真理教に入りたと言い出した。これに父親が説得するん会的動物として成長していくには、母親との相互関係がとても大切なのです。最初に意味のある言葉が出てくるのは、1歳の誕生日前後です。しかし、話しかけることが少なくなっているため、初語の時期が遅れてきています。

初語の遅れの原因として、もうひとつテレビがあげられます。テレビを子守り代わりにしている家庭が多い。NHKの調査では、4カ月以上のゼロ歳児の5割がテレビを見ている。それも、1日に2時間20分も見ている。1歳児になると、8割がテレビを見ていて、視聴時間は1日2時間48分にも達しています。

アメリカの話ですが、ろうあ者の



企業と生活者懇談会

「企業の考えていることや、その姿勢がよく分かりました。きょうは本当にありがとう。」企業と生活者懇談会に参加した方からこの言葉をいただく時、ホッとすると同時に、これからも企業と社会広聴会員との橋渡しを続けていかなければと気持ちを新たにします。

今回は、スカイパーフェクTV！、林原、キヤノンと訪問しました。各企業での社会広聴会員と企業との「対話」を感じていただけたら幸いです。

	開催日	開催地	協力企業	見学場所
第72回	7月1日	東京都江東区	株式会社 スカイパーフェクト・コミュニケーションズ	青海放送センター
第73回	7月28日	岡山県岡山市	株式会社 林原	藤崎研究所
第74回	8月8日	東京都大田区	キヤノン 株式会社	キヤノンギャラリー

懇談会

夫婦に子供が生まれました。両親は子供との会話は手話で行いましたが、子供が言葉を喋ることができるようになると、テレビをたくさん見せました。その結果はというと、手話は完全にマスターできたものの、言葉は理解できないまま育ってしまった。

言葉が人間を作っているのです。しかし、おじいちゃん、おばあちゃんも近所の人もいなく、語りかけが少ない状況では、言葉を幼児期に体感するのは難しくなっています。「人間は読み書き能力を磨いて自分を作る。本が死ぬところ、暴力が生まれる」と言った人がいます。しかし、今はテレビが識字の道を妨害し、人から考える力を奪ってしまっている。子供が育つには、人と人との直接の交流、つながりが一番大切な要素です。便利な道具ではあるけれども、テレビや、携帯電話、インターネットは直接のコミュニケーションを妨げている。

経済広報センターの今回の「教育に関するアンケート」の中に、家庭での子供とのスキンシップに関する質問がありました。親とのスキンシップ、特に父親とのスキンシップが減っているという結果が出ています。父親との接触が減っているのは

問題です。文部科学省の調査でも、父親が子供と過ごす時間が少ないという結果が出ています。世界一少ない。成熟国では、家族と一緒に食事をするのが普通ですが、日本ではできていない家庭が非常に多い。

遊びも人間形成の上では非常に重要な要素です。年齢の違う子たちと遊ぶことで、社会性や協調性、独創性が培われます。今の子供たちは家の中でテレビゲームをして遊びます。これは本当の遊びではないと思います。遊びとは本来、自分たちでルールを作って、コントロールするものです。ところが、テレビゲームの場合は、はじめからルールが決まられている。戦前の子供は4000種類の遊びを知っていました。しかし、今の子供はわずか20種類しか知らないということ。昔は夕方、「ご飯だよ」というお母さんの声で、1人ずつ子供が遊びから抜けていく光景がよく見られたのですが、最近はそういうことがなくなりました。一方で遊びは危険でもあった。そうした中で、邪悪なものを見分ける感覚を研ぎ澄ました。ですから、オウムなんか誘われても、ついていきません。今の子供は無個室で育てられている感じがします。そういう子供

には抵抗力がない。

この他にも、生活体験や家の手伝いをする機会が圧倒的に少なくなっています。昔は洗濯や買い物、あるいはリンゴむきなどを手伝ったりしました。今はそんなことをする暇があったら、勉強しろと言われてしまつ。

子供のどんな成長を喜ぶのか

10歳から12歳の子供を持つ親を対象に行った「子供の成長についての満足度調査」というものがあります。これもシヨクを受けた調査でした。「子供の成長に満足しているか」という質問に対して、満足と回答したのが日本36.3%、アメリカ84.5%、スウェーデン82.7%、タイ74.1%、韓国52.9%で、日本は他国と比較して異様に低い結果が出ています。子供が成長するにつれて、満足度が低下しているのです。日本の子供の出来が特に悪いわけではない。親が子供の成長に何を期待するかなのです。日本の親が子供に期待しているのは、学校の成績です。それも他の子供との比較においてです。そうすると、期待に沿えるのは全体の3分の1程度でしょう。子供は自分が親に期待されていないことが敏感に分かるものです。それに気づいた子供

は非常につらいと思います。

親の側の意識を変えないと、子供は救われない。親のほうで子供の何を評価するのか、判断軸を変えなければならぬ。学校の勉強が苦手な子供もいる。スポーツが得意な子供がいれば、素直な子供もいる。子供たちの長所を認めることが大事なのです。

また、道徳観や正義感の家の手伝いや自然体験、生活体験の多い子供ほど培われるという文部省の調査結果があります。道徳観、正義感を持つ子供を育てたいと誰もが思いま。それには学校の成績だけでは足りないのです。子供の良さをしっかりと認めていくことが大切です。周りを見渡してみると、遊びや生活体験が少なくなっています。行政や地域社会、そして私たち一人ひとりが意識してこのような機会を作っていく必要があります。

日本には学校信仰があります。何でも学校を最優先に考える傾向があります。学校の役割はもちろん重要で、その役割がなくなることはないのですが、学校に学力、躰といったすべてを頼るのは不可能です。基本は家庭であり、地域社会なのです。学校だけでできる問題ではないのです。(文責 専門研究員 山田俊彦)

第72回(東京 7月1日)

スカイパーフェクト・コミュニケーションズ 青海放送センター

会社概要

当社の沿革をたどると、1996年10月に、当社の前身である「日本デジタル放送サービス」が、日本で初めての多チャンネル放送である「パーフェクTV！」として、テレビ番組57チャンネル、デジタルラジオ番組4チャンネルで本格放送を開始しました。

1998年5月に、「日本デジタル放送サービス」と「ジェイ・スカイ・ビー」という2つの放送サービス会社が合併し、現在の「スカイパーフェクTV！」となりました。

2003年5月末現在、「スカイパーフェクTV！」の加入件数は約341万件、昨年7月に開始した「スカイパーフェクTV! 2」の加入件数は約4万8千件、合計約346万件の方に加入いただいています。



放送のデジタル化は世界的な流れです。最初にデジタル放送を実施したのは、アメリカのディレクTVです。イギリスでは地上波のデジタル化は1998年から開始しています。アメリカやスペインに続き、日本も三大都市圏の一部で、地上波で



二つ目は放送内容の高機能化です。BS放送でも、CS放送の一部でも実施していますが、データ放送や双方向性といったことが可能になります。例えば、放送中のクイズ番組に直接参加できます。また、画面に流れている音楽のCDを欲しいと思ったら、簡単な操作でCDが買えるようになります。三つ目の特徴として、マルチチャンネルがあります。この機

能により放送時間を気にせず、自分の好きな時に、いつでもニューアや天気予報が見られるようになります。青海放送センター「スカイパーフェクTV!」のメイン事業はプラットフォーム事業です。プラットフォーム事業とは、番組を放送してもらいたいという会社から委託を受けて、それを衛星に送る事業のことです。衛星に送る業務は目黒、青山、大阪、青海の4カ所を担当しています。スカパーは3つの衛星に地上から映像を送っています。先ほど説明したように、東経124度、128度、それから110度の衛星です。放送にいたるまでの全体の流れをお話すると、まず放送を希望する会社から番組をいただきま

わが国のテレビの進化

地上放送として、1953年に白黒のテレビ放送が始まりました。その後、40年以上アナログ放送だけの時代が続きましたが、日本でも1996年からデジタル衛星放送がスタートしました。2000年12月にはBSデジタル放送もスタートし、現在はデジタル化の最後ともいえるべき地上波のデジタル化の準備が進められています。地上波のデジタル化は、まず東京、大阪、名古屋の三大都市圏で今年の12月から始まる予定です。

CS放送、BS放送とよく聞きますが、一体何が違うのでしょうか。実は衛星の位置や伝送方式が違うのです。東経124度、128度にある衛星が「スカパー!」などのCS放送用、東経110度には、「スカパー2!」などのCS放送用の衛星と、BS放送用の衛星があります。それぞれに別の受信装置が必要になります。

視聴動向について

全国の平均普及率は7・8%です。中期計画では、2007年に全国普及率を10%、件数にして500万件を計画しています。

一番普及率が高いのは、静岡県で10%を超えています。ここはサッカーファンが多いことに加え、多チャンネル放送に限らず、新しいものを進ん



で受け入れる地域性があるようです。

当社で目標としている普及率の数値は10%で、宮崎、島根、滋賀、福井県が該当します。

これらの地域で普及率が高い要因は、地上波の民放チャンネルが少ないことや、より多くのチャンネルを希望してスカパーをご覧いただいているお客様が多いという点にあります。一方、大阪と東京といった大都市での普及率は、

数%レベルと比較的低い水準にとどまっています。加入総数自体は大都市では多いのですが、普及率になると、衛星の受信用のアンテナを立てられない集合住宅が多いことなどから、低くなっています。

当社の加入者を年齢層で見ると、加入を促進させる宣伝をたくさん行った効果もあり、20〜30歳代のお客様さまが比較的多くなっています。

デジタルが今年12月から始まります。

では、デジタル化とは一体どのようなことなのでしょう。カラーテレビになった時は白黒から色付きになり、外国の俳優が出てくると「目の色が青いのね」、「色が本当に白いのね」と分かりました。デジタルになった時、何を通して実感できるの

多重放送について

今年の12月をめどに、東京の一部の集合住宅で光ファイバーを使った映像配信事業を始める予定です。都市部に多い集合住宅では、窓が北向きであったり、美観や安全上の規制等もあり、スカパーのアンテナを立てることができないケースが多くあります。多くのご家庭が地上波放送もケーブルテレビで見ている状況で、首都圏では60%がアンテナの難視聴地域にあると考えられています。このような要因から、アンテナから直接受信するスカパーのサービスは、集合住宅では受け入れられにくい現状にあります。こういった問題を解決するために、地上回線である光ファイバーを使って、集合住宅向けにスカパーのサービスをお届けしようという計画しています。

髪の毛くらいの細さの光ファイバーを通して、テレビ500チャンネルと100メガbpsのインターネット通信の提供が可能になります。地上波アナログ放送、12月から始まる地上波デジタル放送、またBSデジタル放送も含めて、全てのチャンネルを光ファイバーの中に押し込んで、集合住宅向けにお届けしようという計画です。

青海放送センター

「スカイパーフェクTV!」のメイン事業はプラットフォーム事業です。プラットフォームとは、番組を放送してもらいたいという会社から委託を受けて、それを衛星に送る事業のことです。衛星に送る業務は目黒、青山、大阪、青海の4カ所を担当しています。スカパーは3つの衛星に地上から映像を送っています。先ほど説明したように、東経124度、128度、それから110度の衛星です。

放送にいたるまでの全体の流れをお話すると、まず放送を希望する会社から番組をいただきま

ほとんどが有料放送です。有料番組の視聴の可否は、有料視聴の申し込みを受けたカスターマーセンターが「鍵」にあたるデジタル信号を衛星を使って送り、その「鍵」を受け取ったチューナーは有料放送を見ることのできるようになってます。「鍵」を持っていない視聴者は、番組を見ようとしても見られません。また、「ペイ・パー・ビュー」というサービスもあり、ある番組だけ、あるいは1日だけ有料チャンネルを見たいといった場合、これを利用できます。

Q & A

Q サッカーなどスポーツ番組がスカパーの一つの売りだと思つていますが、全般的に子供向けの番組が少ないと感じます。今後の番組編成の方針についてお聞かせください。

A 皆さんが日常ご覧になつている民放各局は、自分たちで多くの番組を制作し、放送しています。つまり、番組という「ソフト」制作と放送という「ハード」の2つの事業を行っているのです。それに対して当社は、プラットフォーム事業者という位置付けにあります。当

社は、放送事業者から受けた番組を衛星に伝送するのが主な仕事です。つまり、番組制作という「ソフト」と、放送という「ハード」が別々に行われているのです。

スカパーは加入者を増やし、契約件数が350万件を超えました。しかし、事業を始めた頃は、お客さまの数が少ない中で、多額の投資をしなければなりません。そのような中で、お客さまを増やすコンテンツとして、多くの方に人気のあるサッカーなどスポーツで需要を掘り起こしてきました。

350万件とお客さまも増えてきたので、今後はお客さまの持つ潜在的なニーズを把握したり、専門的で特徴のある分野の番組提供を進めていきたいと考えています。

Q 番組編成は、どのように進めているのですか。売り込みがあった中から選ぶのか、それともスカパーさんから作って欲しい番組をお願いするのでしょうか。

A 日本には放送法をはじめさまざまな法律があり、各種の規制の下にあります。規制の厳格な順番に事業者を並べると、まずNHKがきます。次に一般放送事業者

である民放各局。そして、委託放送事業者、役務放送事業者といった放送設備を持たない業者が、規制緩和で放送事業に参入することが可能となりました。

それぞれの事業者に対して、総務省から免許が交付されています。例えば、委託放送事業者が海外のテレビで良い番組を見つけ、国内で紹介したいと考えれば、総務省に免許の申請をします。さまざまな審査を経て、認可を受ける。その認可を受けた番組がスカパーに入ってくるのです。

当社に番組を提供するのは、この委託放送事業者と役務放送事業者になります。

番組の編成という点になると、これは事業者の仕事になります。委託・役務放送事業者が自分たちで、どういった時間帯が視聴者にとって見やすい時間帯だろうか、自分たちがターゲットにしている視聴者はどの時間帯に多いだろうかといったことを考えて編成します。



入を得ているところもあります。が、民放のようにそれをメインにしてビジネスをしているチャンネルはほとんどありません。民放の15秒のCMにかかる費用と、当社の30秒あるいは1分のCMにかかる費用とでは、金額が数十倍は違うと言われています。スカパーは大きくなったといっても、お客さまの数は300万規模です。通常の民放は、その一ケタ上の

Q 私たちが普段見ている民放の番組では、CMなどが番組の合間に流されていますが、CS放送ではどのような取り扱いになっているのですか。

A チャンネルによってはCMを入れ、スポンサーから広告収入を得ているところも

あります。そのぐらい差があります。しかし、そういうところで、一生懸命に気持ちを入れて番組を作りたいとおっしゃる制作会社もいっぱいあります。6時間全部使って、ひとりの人を追うドキュメンタリーを作るなど、民放では考えられない番組を作っています。

Q サービス開始当初より、利野球中継を見るために、ペイ・パー・ビューのプロ野球セットの契約をしています。しかし、Jスカイとの合併の後遺症でしょうか、放送があるのに受信できない試合があります。電話で問い合わせたところ、チューナーを買い替えないとダメだということでした。チューナーを買った時期が早かったというだけで、同じ料金を払って

現場の我々としても、視聴者が本当に興味を持って見ていただけのような番組を作って、放送するということを常に考えています。ところが、一方でそれには非常にお金がかかることもあり、すべて思い通りに動くわけではないですね。ジレンマに陥ることもあります。ビジネスとしてもっと回転するようになれば、若干余裕が出てくるのではないかと思います。当社はデジタルという武器を持っています。今後はこのデジタルを軸に、事業の拡大を図ることを考えています。今後、加入者が増えればポジティブ・スパイラルとなって、良い内容のチャンネルもどんどん育成できるのではないかと考えています。

当社でも自前のチャンネルを複数持っています。これらのチャンネルに対して、どのような番組を提供するのが適切なかをマーケティングしています。基本的な考えとして、スポーツは生中継が大事だと思つています。放送を見逃した方のために、再放送もしています。見て欲しい方に、見やすい時間に編成することが、編成のあるべき姿だと考えています。



るのに見られないというのは納得がいかないのですが……。

A おそらく最初のチューナーをお持ちなのだと思います。1996年に「パーフェクトV」がスタートした時にご購入いただいたチューナーは、東経128度にある衛星からの電波を受信しています。その後、1998年にジェイ・スカイ・ビーと合併し、こちらは東経124度の衛星から電波を発信しています。合併後は、2つの衛星からの電波を受信できるアンテナ・チューナーが販売されています。

最初にご加入いただいた方々は、当社にとっては大変貴重なお客さまです。そういう方々に対して、今後どのように対応していくのが重要な課題ですが、他の視聴者に費用が跳ね返ってはずいぶん。当社が成長していく過程で出てしまった問題です。こうした事情もご理解いただき、チャンネルの編成などでご満足いただけるよう心がけています。

Q ケーブルテレビは頻りにチラシが入ってきますが、スカパーのチラシは見かけません。家電屋さんに行けば、スカパーのサービス



明治16年、岡山に「太陽印」の麦芽水飴会社「林原商店」が創業されました。昭和34年には酵素を利用してブドウ糖を生産する「酵素糖化法」

の工業化で、世界的な技術を確立しましたが、競合会社の乱立で徐々に生産過剰に陥りました。ここで、林原は他に真似のできない独自技術の研究、開発を進めることがいかに重要であるかを改めて認識し、単なる商品生産の会社から、研究、開発型企業への脱皮を図りました。

糖の製造を例にとると、単に生産だけを考えるのではなく、さらに基礎となる微生物・酵素の研究開発を進め、昭和43年には「酵素法」により、高純度のマルトースの新製法を開発し、海外26カ国の特許を取得しました。これは大塚製薬から注射液として製品化されています。さらに平成6年には、「夢の糖質」と呼ばれる「トレハロース」の安価・大量生産技術を開発しました。でんぷんを原料に直接トレハロースを製造するの100分の1のコストで生産できるようになり、今や食品や医薬などに極めて広範囲に利用されています。



（株）林原生物化学研究所・藤崎研究所の設立

こうした研究の過程で、林原は「生理活性物質」に着目しました。生理活性物質とは、人の体が自然に作り出している天然の物質です。人間の体は、健康状態を維持するため、酵素・ホルモン・サイトカインなどの超微量の生理活性物質を自然に分泌しています。これらの物質は人が健康を保つ上で、極めて重要な役割を果たします。例えば、サイトカインの一種であるインターフェロン（IFN）は、人の体内に侵入したウイルスが細胞に感染したり、増殖したりするのを抑制する作用があります。また、ガン細胞に対しては、細胞を殺す作用を持っています。これが「天然の医薬品」といわれる理由で、こうした生理活性物質に焦点を当て、研究を進める

第73回 岡山 7月28日

株式会社 林原 藤崎研究所

林原の歩み

明治16年、岡山に「太陽印」の麦芽水飴会社「林原商店」が創業されました。昭和34年には酵素を利用してブドウ糖を生産する「酵素糖化法」

の工業化で、世界的な技術を確立しましたが、競合会社の乱立で徐々に生産過剰に陥りました。ここで、林原は他に真似のできない独自技術の研究、開発を進めることがいかに重要であるかを改めて認識し、単なる商品生産の会社から、研究、開発型企業への脱皮を図りました。

（株）林原生物化学研究所・藤崎研究所の設立

こうした研究の過程で、林原は「生理活性物質」に着目しました。

生理活性物質とは、人の体が自然に作り出している天然の物質です。人間の体は、健康状態を維持するため、酵素・ホルモン・サイトカインなどの超微量の生理活性物質を自然に分泌しています。これらの物質は人が健康を保つ上で、極めて重要な役割を果たします。例えば、サイトカインの一種であるインターフェロン（IFN）は、人の体内に侵入したウイルスが細胞に感染したり、増殖したりするのを抑制する作用があります。また、ガン細胞に対しては、細胞を殺す作用を持っています。これが「天然の医薬品」といわれる理由で、こうした生理活性物質に焦点を当て、研究を進める

出席者の感想から

スカイパーフェクTV!

生活者の目線で企業と懇談ができたことは、大きな意義がありました。

また、企業側も生活者の意見が聴取できたと思います。スカイパーフェクTV!は、従来の日本の産業社会にはなかった企業で、その成り立ち、課題、経営施策などが大変参考になりました。

テレビを見るのが大好きな私ですが、与えられた番組の中から、今何を見ようかと選ぶのではなく、この番組が見たいから見るようにするというのが、特にこれから年をとっていく上でも、とても大切なことだと思いました。

「288の多チャンネル、24時間放映」すごい時代なんだなあと驚いています。これからは時間の使い方、得た情報の中から自分が何を選択するか、その選択眼が大切なんだと痛感しています。

衛星放送システムの現場に接する機会を作っていただいたお陰で、その原理、設備、支えるスタッフの実態がよく理解でき、大変勉強になりました。あわせて、視聴者の多様性の一端にも触れることができ、情報化社会の理解を深める上で、異色の体験をさせていただいたことを感謝しています。

Q 私はスカパーの株主なのですが、株主宛てに「あなたはスカパーの加入者になっていますか」

Q 他のメディアとの競合が激しくなることが予想される中で、スカパーの独自性をどう出していきますか。

A WOWOWやケーブルテレビが良きライバルなのかもしれないですね。

業者にお集まりいただいている。それをいろいろな経路を使って、視聴者に届ける。この仲介役を当社がきちっとやっていく。それがコンテンツを持つていく方々にとっても、視聴者にとってもメリットになると思います。今は衛星放送が中心ですが、今後は伝達方法をどんどん広げていきます。

A おっしゃる通りだと思います。ケーブルテレビはインターネットのサービスとセットで、強力に営業を進めていますね。今まで家電屋さんを中心に営業を進めてきて、これはこれで効果を上げています。こうしたやり方は、一面では大変お金がかかる手法です。いずれにしても、PR不足が加入者増に結びついていないことが、今日の懇談会の中でもよく分かりましたので、営業にもきちんと伝えていきたいと思っています。

A 今のご意見は非常に耳が痛い。本年度株主さんにお送りした書類には、当社の商品説明と加入のパンフレットを入れさせていただきます。当社には株主さんが4万人います。希望としては、少なくとも全員に加入していただきたいと思っています。まず株主さんにご加入いただいで、率直な、そして色々なご意見を伺いたい。株主さんから周囲の方に加入者を増やしていくことが大切だと考えています。今後努力したいと思っています。

映像をはじめ情報を届ける経路は、その時々でどんどん増えたり、変わったりしていくでしょう。しばらくすると、携帯電話でテレビが見られる時代がくるかもしれません。途中の経路はどうであれ、視聴者にコンテンツをきちんと届ける。当社には、多くのコンテンツを持った事

将来にわたって多チャンネルの文化を根付かせるためには、他社との提携も考慮しなければならぬだろうと考えています。それを実現するために、販促費、広告宣伝費を有効に使い、魅力あるコンテンツを用意して加入者を増やす。そして、多チャンネルを根付かせる。こういったことを実現するために、積極的に取り組んでいきたいと思っています。

キヤノン株式会社 キヤノンギャラリー

会社概要

1933年に東京麻布の六本木に「精機光学研究所」として設立されたのが、当社の歴史の始まりです。その後、1937年に会社設立し、1969年に「キヤノン株式会社」に社名変更をして、今年で創立66周年を迎えます。

当社の社名である「キヤノン」は、もともと「観音」様に由来しています。1934年に国産初の35ミリカメラを試作したのですが、このカメラの名前が「KWANON(カンノン)」でした。なぜ観音かという点、当時このカメラを設計した技術者が、仏教に非常に詳しい観音様の信者だったからです。そこで、観音菩薩をモチーフにした印をカメラの試作機に刻んだのです。その後、観音カメラでは世界的に通用しないという点で、発音が比較的似ている英語の「規範、基準」といった意味を持つ「CANON(キヤノン)」と名前を付けることになりました。キヤノンの主要製品として、皆さんはまずカメラを思い起こされると



では言われています。しかし、当社は限りある資源を有効に使い、高い付加価値、高いサービスを皆さまに提供する努力を絶えず続けています。当社は「中期環境目標」を設定しています。これは、3年から5年先のキヤノンがどうあるべきかということ、具体的な数字で提示しているもので、例えば製品であれば、キヤノンの製品は3年後はこうでなければいけないといったことを示しているものです。この目標に対して、各事業本部、各生産会社、販売会社

思います。これ以外にも多くの製品を取り揃えており、レンズ、ビデオカメラ、双眼鏡、プリンター、スキヤナー、ファクシミリと、個人向けの製品があります。またオフィス用の複写機や液晶プロジェクト、産業用として半導体製造装置や液晶を作るための露光装置なども製造しています。その他にも医療機器として、眼底撮影用のカメラやX線関係の製品なども製造しています。

このように幅広い製品を取り扱っており、キヤノンの歴史は多角化の歴史ともいえます。1934年の国産初の35ミリカメラの試作に始まり、1964年には世界初のテンキー式電卓を発売。1970年には、ゼロックスの特許網をかいくぐって、国産で初めて製造にこぎつけた国産初の普通紙複写機NP1100を発売しています。カメラに始まり、計算機、複写機、プリンター、ファクシミリと次々に新しい商品を出しています。

キヤノンの歴史はグローバル化の歴史でもあります。1955年にニューヨーク支店の開設を皮切りにグローバル展開を進め、現在キヤノングループ会社は全世界に255社を数えます。販売関係で142社、生産関係で55社、開発関係で14

が努力をする形をとっています。この目標の進捗を管理するために、業績を評価する連結業績システムを採用しています。これは各事業本部が、半年間の成果を売上額など経営指標を用いて、業績を評価していくものです。その業績評価の一つの指標として、環境に関する項目も入れています。半年ごとに、各事業部と関係会社の業績を、環境という側面からもチェックしているのです。経営データをはじめとするいろいろなデータと横並びで評価され、順位が社内的に発表されます。やはり下位にランクさせられると、その責任者は気持ちがいいものではありません。トップを目指そうということになります。そういった競争原理を社内に取り入れて、中期環境目標の達成に向けて努力をしています。

今年6月に2010年ビジョンとして、「ファクター2」という総合指標を設定しました。商品のライフサイクル全体でCO₂が排出されます。2010年の売上高をこのラ

社、その他44社と日、米、欧、アジア、オセアニアにくまなくグループ会社があります。

キヤノンの企業理念

当社の特長の一つに、研究開発が旺盛なことがあります。研究開発費に対して多くの金額をかけており、昨年度の実績で2374億円を研究開発に向けています。連結売上に対する研究開発費の比率は、現在8%程度ですが、10%以上確保することを目標としています。多額の研究開発費を投じた成果として、特許の登録件数が非常に高くなっています。例えばアメリカにおける特許の登録件数では、過去10年以上、5位以下に落ちたことがありません。昨年度もIBMに続き、第2位の特許登録件数を誇っています。日本企業の中ではもちろんトヨタです。キヤノンは多額の研究開発費を投じて特許を取り、それにより事業を守るといふ形をとっています。

これらの企業活動を支えるキヤノンの企業理念は何かといえば、それは「共生」です。当社の考える「共生」とは、「世界の繁栄と人類の幸福の



ために貢献する」ことです。そのために、「事業の成長と発展を果たすこと」を目的としています。地域における共生、環境面では次の世代との共生、こういったことを全てを考へながら企業活動を行っています。

環境への取り組み

地球環境との共生という観点から、環境問題はキヤノンにとって非常に重要な課題です。利潤追求や製品を通じて社会に利便性を提供するという点と、環境問題というのは、相反するものではないかと、世の中

イフサイクルCO₂で割った数値を、2000年の2倍以上にしようというものです。例えば、2000年と2010年の売り上げが同じであった場合には、キヤノンが地球全体にかけているCO₂の負荷を半分に減らそうということです。つまり、資源を半分にする、エネルギーも半分にする。要は半分のもので同じだけの価値、つまり売り上げを確保しようということ、現実的に可能であると考えています。当社の製品をお客さまが使用する段階で、CO₂の排出量を従来ものと比較して4分の1から5分の1にする技術はできています。こういったことを上手に組み合わせれば、現在のキヤノンの製品がかけていた環境負荷を、2010年までに半分にすることができると考えています。非常に高い目標ですが、キヤノングループ全体で成し遂げたいと思っています。

を自宅に持っていったのですが、夏だとクーラーとクーラーを同時に使うとブレーカーが落ちてしまうこともありました。自宅用で、コピー枚数が多くない場合には、充電式で対応できれば、使い勝手がとても良くなると思います。

Q & A

Q

充電できるコピー機があったら良いと思います。企業などで電気が安い夜間に充電しておいて、日中使う時にコンセントを抜いておけば、節電にもつながります。私はファミリーコピー

A

電源も非常に大きな問題です。複写機で使っている電子写真という方式は、トナーを溶かして紙に定着をさせるために、200近くまで温度を上げなければいけません。それも瞬間的に200近くまで温度を上げなければいけません。かなりの電気を消費します。提案のように電池を使うとなると、かなりの電気を消費するために、どうしても頻りに取り替える必要が出てきてしまいます。それは結果として、環境的にもあまり芳しくありません。一方で、燃料電池など新しい技術がどんどん出てきているので、こういった新技術は積極的に採用していきたいと考えています。

Q

リストラが叫ばれる中、終身雇用を堅持しているキヤノンは非常に稀有な存在ではないかと思えます。これについての基本的な考え方を教えてください。

A

一つの製品が市場に出て定着するまでに、非常に長い時間がかかります。研究開発から始めて、製造現場の人が慣れるまでに多くの時間がかかるのです。当社は社員に対して安定した仕事の環境を与えることは、結果として会社にとって活力になり、高い成果を生み出すことになると考え、終身雇用を採用しています。ただし、終身雇用だけではなく、同時に実力主義も採用しています。単なる終身雇用だと会社の中の気が緩んで、何もしなくても会社が守ってくれるという、ぬるま湯的な感覚が芽生えてしま



ます。キヤノンは創業当時から実力主義をとっていて、26歳で昇格試験があり、それに合格すると給与が上がるといふシステムになっています。大学卒で40歳くらいでも資格を取っている人とそうでない人は、2倍くらいの給与差がついてしまします。終身雇用を標榜しながらも、社内を実力主義で刺激し、会社を運営しています。

Q

デジタルカメラが普及して、今までのようにカメラ屋さんに行き行ってプリントをしなくても、自宅のプリンターに仕上げれば簡単に綺麗にできるようになりまし。今後こういったデジタル化は、我々の生活の中でどのように進んでいくのでしょうか。

A

間違いなくデジタル化は進んでいくと思います。皆さんが普段使われている電子メールなど、時間や空間というものをあまり意識しないで情報をやりとりできるのは、デジタル化の大きなメリットだと思います。例えば、イギリスで撮った写真をすぐに日本やアメリカへ送るといった楽しみ方ができるのは、やはりデジタルならではの特徴です。

今は文章や写真など、動画でないものがデジタルでのやりとりの中心ですが、これからのブロードバンド時代では取り扱うことのできる情報量がどんどん増えて、動画も送れるようになってきます。キヤノンも動画をスムーズに送ることのできる入出力の機器の開発をしています。



CDプレイヤーではなく、アナログレコードが好きだという方もいらっしゃるように、フィルム式のカメラが好きだという方もいらっしゃると思います。そういったお客様も当社としては大切にしていきます。デジタルに切り替わったからといって、アナログのカメラの製造を止めるということはありません。

Q

主婦感覚のリサイクルと企業さんのリサイクルは、考え方が違うのだと感じました。これはキヤノンだけでなく、家電全般について言えることです。私たちの主婦感覚では、古い製品でも修理して、できるだけ長く使いたいと考えます。

A

ご指摘はごもっともだと思います。当社も製品のロングライフ化が一番だと考えています。製品のロングライフということでは、例えば、機能がどんどん上がっていく中で、ハードは変わらず、中身だ

けがどんどんバージョンアップされていくという形が、一番望ましいところだと思います。当社としても最終的にはそういった製品を作りたいのですが、まだその段階にはありません。



現状ではどうしてもハード自体を交換しないと、機能が上がりません。故障という問題に関しては、過剰品質といわれるほどの品質を目指しています。ケ

ースがあります。そのあたりが上手く片付けられずに、苦労しているのは事実です。最終的に資源を本当に大切にしていこうという時代がくれば、ハードの物を次々と買っていただくのではなく、機能であるサービスを買い増していただくような時代が来ると思います。そういった時が来た場合でも、当社が皆さまのお役に立てるよう頑張っていきたいと考えています。

Q

昨年、プリンターを購入しました。これを梱包する箱の中に、包装材料とマニュアルが2冊入っていました。プリンター自体を梱包するだけなら、箱はそれほど大きくなくて済むのですが、包装とマニュアルを含めると非常に大きく、ゴミにもなっています。

A

梱包材料がお客さまの所で、ゴミになってしまうので、できるだけリサイクルしやすい材料を使おうと、取り組みを進めています。古紙を固めたような「パルプモールド」という物で梱包しているものは、資源として出していただければよいと思います。しかし、パルプモールドというのは欠点があります。衝撃に弱いのです。その点でいうと、発砲スチロールにかなう緩衝材はないのです。発砲スチロールであれば、ある一定の高さから物を落

としても十分耐えられるのですが、パルプモールドだと梱包を大きくしないと、十分な緩衝力は得られません。万が一お客さまが購入してお持ち帰りになる途中で落とされて、壊れてしまったとお申し出があったら、我々是对応せざるを得ません。そういったことを考えれば、お客様の手元にしっかりと届くまでは、やはりきちっとした梱包でやらざるを得ないのです。リサイクルに配慮した材料で梱包して、梱包材に紙だとかプラスチックだとか素材を知らせるマークを全部に付けています。それに従って、お客さまのほうで分別をしていただければ、資源に回るといふ形で運用させてもらっています。

(文責) 主任研究員 立田邦夫
専門研究員 山田俊彦

出席者の感想から

キヤノン株式会社

意見の交換で、環境、特にリサイクルに関する意見が多かったと思う。これから一消費者として、どのような姿勢で製品を購入し、消費するか考えていこうと思った。

私たち消費者は、商品の軽量化、機能、価格など目先のことにとらわれがちだが、タバコの箱大のカメラ一つと比べても、その裏に込められた企業理念の重さが随所に活かされていることを知った貴重な一日でした。

環境配慮にはお金がかかるということ、そのお金は企業だけでなく、消費者も応分に負担するべきであるということ、皆さんあまり考えていなかったのかと思ってしまいました。モノをつくる企業に、環境配慮もすべてお任せというのは、ちょっと違うのではないかと、懇談の話を聞きながら考えてしまいました。

21世紀の製造業のあるべき姿として、単に製品を販売し利益を出せば良いという安易な考えではなく、LCA(ライフ・サイクル・アセスメント)の実施が大切なことを思っていた。キヤノンでは正にそれを実践されており、感心した。

「社会広聴会員」からのご意見・ご感想

『ネットワーク通信NO.17夏号』を読んで

「企業ホームページの利用 実態アンケート」について

ホームページ等インターネット全般は、いまだ20歳代がメインに活用している媒体と想っていたが、40歳代、50歳代もかなり活用していることが分かり、時代が変わってきていることを実感した。今後は当社もさらにホームページの活用を進めていかなければいけないと思う。

(20歳代・女性)
今ではインターネットが当たり前になっていきます。パソコンにあまり詳しくない私にとって、ホームページに多くの情報が入っていると、取り残される気がしてなりません。企業もホームページにとらわれすぎている気がします。

(20歳代・女性)
企業の「つわさ」に関するホームページについて、信憑性が低いと結論付けられました。しかし、自分が抱えている問題について書かれていたら、信じてしまうというのが人間の心理ではないでしょうか。企業とトラブルがあった、あまりよくない対応を受けた...ということがあ

った場合、人はホームページの「つわさ」をみて、「やっぱり、あの会社ならそういうことをしかねない」「こんな契約をしてみましたけれど、ホームページに書いてあるから、やはり悪徳商法なのだ」等々、多少の飛躍を含んで記述を100%信じてしまつように思います。行政相談員をしていいますが、相談現場でそのような状況に接したことが何度かあります。食品表示などのアンケートでもよく言われるように、アンケートの結果と実際の行動には乖離があるものです。

(30歳代・女性)
商品の購入を考える時、企業の商品紹介ではマイナスの部分から分らないので、他の購入者の意見を調べるものがあつたが、企業そのものの「告発」を見たいと思つたことがなかつたので、「告発」、「つわさ」などのホームページを一回以上見る方が約半数に上るといふのは、ちょっと驚いた。習慣的に見る方たちは、その情報をどのように利用しているのだろうか。

(30歳代・女性)
製品・サービスの紹介に対する期待が大きいことを実感しました。ますますインターネットを通じて行っていくのが普通になるのでしょう。しかし、IT化に取り残される消費者に対して、企業とのパイプも確保し続けてほしいものです。

(30歳代・女性)
消費者が思いついた時、能動的に企業の情報を詳しく知ることができることはありがたい。メールによって担当者から直接返事が得られることは、一方的な情報の受け取りではなく、気軽に企業につながる実感があるので、意味は大いだと思う。

(40歳代・女性)
ITを企業の宣伝広報の媒体として利用するばかりでなく、社員の連帯感を高めるために使うことにより、企業の和が広がると思います。数年前、息子の勤務先の社長から資格試験合格のお祝いメールが届いたときは、社長の個々の社員への気配りが感じられ、人ばかりでなく、家族も企業への信頼感が強まりました。

(50歳代・女性)
いずれの企業もIT広報の重要性を理解しているもの、ターゲットの絞り方、情報発信の中身の濃さなど、具体的な戦術に苦勞しているようだ。経営戦略を分かりやすく発信するホームページの進化を期待したい。

(60歳代・女性)
ホームページの情報源としての位置付けが、30〜40歳代と50〜60歳代とでは逆になっていて面白い。私も60歳代ですが、主要な情報源として利用している。

(40歳代・女性)
企業ホームページの長所は、情報を求める人にはその分野に関し、かなり多くの情報を提供できるところにあると思う。新聞・雑誌等は、企業の立場にたつて会社の全製品を網羅することはできないので、消費者にすれば自分が必要としている情報はほんのわずかでしかない。ホームページは利用者の利害関係が一致しているので、今後も利用率は増加の一途ではないかと考える。

(40歳代・男性)
「企業情報における位置付け」で「主要な情報源である」が45・8%というのは、多い感じがして意外でした。企業のホームページは、当該企業のPRのオンパレードであるのは当然であり、新聞・雑誌・テレビ等での情報の補足くらいにしか思っていなかったので、あまり重視していませんでした。「企業の告発、つわさのページ」が

(60歳代・女性)
濃さなど、具体的な戦術に苦勞しているようだ。経営戦略を分かりやすく発信するホームページの進化を期待したい。

(60歳代・男性)
ホームページの情報源としての位置付けが、30〜40歳代と50〜60歳代とでは逆になっていて面白い。私も60歳代ですが、主要な情報源として利用している。

(60歳代・女性)
ITを取り入れることで、企業の広報が単なる情報の発信だけでなく、生活者から情報も取り込めるといふ双方向性を持ち始めました。今後は、端末環境の違いに配慮した情報発信に期待したいです。

「キッズコーナーで社会が分かる」について

(70歳代・男性)
子供たちにとって、このようなホームページがあることは、興味の幅を広げるきっかけとして、良いことだと思つ。そこから自分の力で学びとったり、体験できるようにする働きかけが必要だと思つた。「百聞は一見にしかず」で、情報を拾うだけで、知識として身に

座談会「ITが変える企業の広報」について

商品を買う前に、ホームページで調べてから購入します。ホームページはリアルタイムに情報を受け取ることができ、どこが一番安いか、どこアフターサービスが良いか、自分が納得するまで選ぶことができる。ホームページの中で、一般モニターが参加できるものがあれば面白いと思つた。

(20歳代・女性)
生活の一部として、なかなかパソコンやITを使いこなしている実感できない私。特に教えていないのに、パソコンで子供用サイトに書き込みをしている小3の娘を見てみると、企業の広報も今後

あることは知っていました。結構見ているんですね。そこまで見る余裕がないのですが、一度見たいものです。

(40歳代・男性)
企業が開設しているホームページの利用率が、90%以上(50歳代でも)というのに驚いています。私もパソコンを持っていますが、利用していない6%です。時代はどんどん前進しているのだなと感心するばかりです。取り残されている感じがします。

(50歳代・女性)
ホームページの利用率が、一番低い60歳代でも83・3%だというのは驚きました。60歳代なら、企業からリタイヤしている人が多いはず。社会広聴会員はそれだけITの先進的な方が多いですね。

(50歳代・男性)
情報を手する媒体が変わってきたのを実感しています。娘夫婦も孫たちも、新聞よりインターネットの方が情報が早く入ってくるので、新聞の必要性を感じないと言っています。前世代の私には少しばかり抵抗がありますが...

(60歳代・女性)
若い世代(あるいは現役世代?)

ついたような錯覚をおこすようなことなく、五感をフルに活用して、子供自身の一生の財産になるよう、大人が誘導できればと思う。

(20歳代・女性)

キッズコーナーは、子供がゲームで利用する程度のものだと思っていたが、紹介されたものを見て、その多様性に驚いた。もっと利用しなければと思う。子供たちのTとのつながりが、今後もっと深くなることが予想される。企業が子供をターゲットにするのもうなずける。

(30歳代・女性)

「キッズコーナー」を設けている企業には、子供を持つ親として素直に良い印象を持つことができ。収益につながるものでなく、「利用実態アンケート」から見ても、ニーズの高いテーマではないけれども、企業に期待したい項目である。

(30歳代・男性)

子供をターゲットにしていくなるとは、あらゆる業種で必要なことではあるが、今や小学生からPCをフルに使う時代になってきたので、今後は「こども」という言葉で一括りにするのではなく、小学

(60歳代・女性)

す面白くなった。スウェーデンヒルズは、ぜひともカラー刷りで見たいページだった。屋根や外壁の色が規制されることで、街全体が個性を保ちながらも、コントラストの妙を奏でているのだろう。

「「意見・」感想」について

企業が再び信頼をとり戻すことは大変でしょうが、切り捨てることばかりではなく、再出発を望んでいる人もいることを、今までよりも強く感じました。

(30歳代・女性)

社員を大切にしている企業が、エンドユーザーを大切にするという意見、私も賛成です。昨今の状況を見ると、不景気を理由に、業績の良い会社もリストラをやっていきます。人を切り捨てる発想の企業に、成長はあるのでしょうか？

(30歳代・男性)

自分の意見だと思っていたのが、多くの生の声に触れてみて、メディアの意見を代弁しているだけではないかと反省した。企業にあれ

生向け、それも低学年向けとか、高学年向けとか、ターゲットの細分化が必要になってくると思う。

(40歳代・男性)

今はいとも簡単に情報を得ることができるが、その過程とか労力を知らないで育つのもどうかと思う。わが子も漢字を辞書でなく、携帯電話で調べ、旅行先の地図も本屋でなく、パソコンで入手している。どちらが良いのか。

(50歳代・女性)

特に小中学校に導入された「総合的な学習」に対応したものが面白かった。確かにここは同じキッズコーナーでも、力が入るのではないかと思う。若年層向けの広報には、ピタリという感じがする。同時に、いまどきの子供には気軽に学べる多様な手段があって、楽しそうだ。

(50歳代・男性)

パソコンを手にしたものの、ホームページの活用がまだ不慣れです。キッズコーナーの存在を知り、その有用性を知ることができました。孫たちにも紹介したいばかりか、私たちにとっても企業を理解する上で大いに活用したいもの

(40歳代・女性)

これ言う前に、自立した消費者、生活者として、物事をきちんと見ているか反省させられます。

(40歳代・男性)

企業の中にいると気付かない、ユーザーの方々からの率直な感想が多く、大変参考になります。本誌は企業をビジネス(収益)の視点ではなく、社会や市民との関わりから取り上げているので、発想のヒントになりそうです。

(70歳代・女性)

論談倶楽部の感想を読んで、雪印を応援している人が多いのを知りホッとしました。二度とあのよ

(70歳代・男性)

うな事件を起こさないようがんばっていると思います、私も応援しています。

(70歳代・男性)

「企業と生活者懇談会」について

世界に誇れる土木技術が日本にあるのだということを知り、とても頼もしく思えた。共同事業体などで、お互いの情報・技術を提供しあうことができれば、そこから更なる発展の方向性を見つければいいのではないか。

(30歳代・女性)

建設現場のゼロ・エミッションに興味を持った。土木工事というと、「廃棄物が大量に発生する」ものだと思っていたが、リサイクルもできるんですね。企業の努力は大変だと思いますが、その努力はいつか評価されると思います。行政、生活者ともに、環境に配慮した会社を選んでいきたいものです。

(40歳代・女性)

大学時代に横浜にいたので、鶴見川には馴染みがある。しかし、当時は台風による浸水被害などはなかったため、過去に被害があったことも、それに対応して河道の拡幅工事が行われていたことも全

「社会広聴活動」に対する

「意見・」感想

何となく物を買って、都市に住み「こんなものだ」と思っていました。しかし、ネットワーク通信を初めて読んでみて、「自分は何も考えていなかったのか」と思いました。物を作ってくれている企業のことをもっと知れば、きっと企業もさら

(30歳代・女性)

このたび、会員になりました。普段の生活の中で、企業をはじめいろいろなことに対して、意見したいと感じることが少なくありません。一人の小さな意見かもしれませんが、社会に何かお役に立てる意見を出せればと思います。

(30歳代・女性)

社会の一員であるという自覚を持ちたくて、社会広聴会員を続けています。今回のテーマであるホームページなどにちゃんと対応できていない年配の方々の存在に、まだまだ努力が足りないかと、反省いたしました。

(40歳代・女性)

地方都市での日常生活では、こ

く知らなかった。都市化が進んで、浸水被害が生じやすくなっているのは、横浜だけの問題ではない。東海地方も3年前にひどい被害が出た。治水工事の必要性はよく分かるが、地震大国の日本でこのような箱型地下遊水地での対応が最適なかどうか、やはり不安が残る。

(40歳代・女性)

遊水地の設置ですが、ないよりはあった方が良いでしょう。しかし、ここまでのコストをかけるなら、別の治水方法もあるのではないかと思いました。

(40歳代・男性)

牧歌的なスウェーデンヒルズですが、寒冷地での家作りや維持管理など大変さが理解できました。不便さに対する質問に対して、会社の方が「あれもこれもではなく、これが大切だ」という生活の選択も一つの考えだと思えます」と回答されているのが印象に残りました。

(60歳代・女性)

清水建設の浸水被害に対応する遊水地建設は興味深かった。読み進むうちに、なぜ「地」が「池」でないのかの説明があり、ますます

これまで新聞、雑誌、テレビの情報しか入手できませんでしたが、インターネットを利用するようになって、急速に情報量が増えてきました。特に社会広聴活動を通じて、企業や商品に目を向けるようになりました。また、大勢のみなさんがITに関心のあることがわかり、刺激になりました。(50歳代・女性)

企業訪問先は、サービス産業がもっと増えても良いのではないかと。例えば、いま問題となっている銀行や証券会社、スーパーやコンビニなどの生活密着企業も選んでも良いと思う。製造業や建設業が多いような気がする。(60歳代・男性)

できるだけ広く活動することが望ましいが、実際問題としてはなかなか大変な事でもある。広聴活動は「口コミ」が非常に有効であり効果的なので、「口伝」を期待したい。(70歳代・男性)

産業の今と明日が見える 『産業データプラザ』『環境情報プラザ』へアクセスしてみてください!

プレゼント実施中 スクリーンセーバー(全員)と図書券500円分(毎月抽選)

経済広報センターは、産業界について広く一般にご理解いただくため、インターネット上に情報サイト『産業データプラザ』と『環境情報プラザ』を開設、運営しています。このサイトへは経済広報センターのホームページからアクセスできます(トップページの左下にサイト表示があります)。

2つのプラザをさらに親しみやすく、役立つサイトにするため、利用者の声をお聞きするアンケートを実施中ですので、皆様のご協力をお願いします。アンケートにご協力いただいた方には、もれなく両サイトのキャラクターを使った特製壁紙&スクリーンセーバーを全員へプレゼント(ダウンロード配布)いたします。さらに抽選で2つのプラザごとに毎月50名の方に500円分の図書券をお送りいたしますので、ご協力をお願いいたします(当選は発送をもって代えさせていただきます)。

産業データプラザ <http://sangyo.kkc.or.jp/> とは...

日本の産業に関わる様々なデータを分野別、種類別に検索できるとも便利なサイトです。また、グラフの自動作成機能もあり、データを自由に加工することができます。

バーチャルスペース“プチてくタウン”ではオリジナルアニメーションや産業界から提供されるストリーミング・ムービーで、産業を楽しく知ることができます。

環境情報プラザ <http://kankyo.kkc.or.jp/> とは...

企業や団体など産業界の環境問題に対する取り組みを、お伝えするサイトです。インターネット上に公開されている企業の環境情報は膨大な量になりますが、環境情報プラザでは、そうした情報を“リサイクル”“環境報告書”といったキーワードを産業ごとに分類しており、目指す業界や各企業のホームページへ簡単にアクセスできます。

事務局便り



立田 邦夫

今年度の企業と生活者懇談会は、複数のテーマを設けていますので、内容がバラエティーに富んでいます。「生活に身近な企業を考える」というテーマで訪問した「林原」はその商品が、医薬品や食品原料の中に目立たないかたちで入っているため、社名そのものはあまりなじみがないかもしれません。しかし、今回のレポートをお読みいただければ、改めてその今日的な重要性がお分かりいただけるものと思います。また、キヤノンのレポートにあるように、世界的に知られるその社名が、発足当時の「観音カメラ」に由来しているなど、意外なエピソードも知ることができました。

山田 俊彦

最近読んだ記事にこんな言葉がありました。「1年の計は穀を植うるにあり、10年の計ごとは木を植うるにあり、100年の計りごとは人を得るにあり」。人材を育てるには時間が大変かかるという意味だそう。昨今の子供をめぐる事件を見ていると、教育はいったいどうなってしまったのかと不安になります。「親から子へ、子からまたその子へ」教育は、DNAのように連続と続くものだと考えます。100年後の日本がしっかりと国であるためにも、対症療法でなく、教育のあり方を根底から考え直す必要があると考えます。



田中 明子

改正リサイクル法に合わせるかのように、パソコンが壊れ、結局、施行前に粗大ゴミとして、自治体に回収してもらいました。購入時に徴収するシステムで、不法投棄が少しでも減ればよいのですが、その考えは甘いかもしれません。今後、リサイクル法の対象が拡大し、最終的には全ての消費財がリサイクルの対象となると考えられます。今まで安易に使い捨てにしていた行動を、見直さなければならない時期に来ているといえます。

岡本 清美

今回のアンケートと論談倶楽部のテーマは「教育」でした。私も2児の母、日々の生活の中で昔と今の環境の違いをいろいろ感じ、子供の教育の難しさに頭を悩ませています。子供は未来の宝、家庭・学校・地域社会等が協力し合って、子供が伸び伸びと生活できる環境を作っていくことができたらいいですね。





表紙のことば

安全神話が崩壊したと言われる我が国にあっては、昨今、人間とは思えない考え方や行動によるおぞましい事件が毎日のように頻発しています。こうした事件を回避するためには、細心の注意を払って日々生活するしかありません。絵のような家族ののどかな風景も危険性の観点から、いずれ見られなくなってしまうのでしょうか。「人間は教育によって初めて人間になる」と哲学者カントも言っているように、社会のルールや人間らしい思いやり、責任感など、高度成長時代におざなりになっていた「真の教育」が、今こそ問われているのではないのでしょうか。

ネットワーク通信

2003 NO18
秋号

<http://www.kkc.or.jp/>

発行 / (財) 経済広報センター
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-6-1 大手町ビル7階
TEL : 03-3201-1412 FAX : 03-3201-1404
発行日 / 2003年10月27日